

[事業報告]

英語試験結果と今後の課題

池田 容子

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

English Test Scores and Task for the Future

Yoko IKEDA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要 約

今までのところ、英語関連科目においては、学生の能力をデータに基づいて客観的にとらえるというよりも、むしろ、ほぼ感覚的にしか眺めていなかった。したがって、学生のことが話題に上った際などは、印象のみに頼って話し合いを行っていた面が多々ある。より効率的かつ効果的に授業を行うために、尚且つ、より客観的に学生の能力を見極めるために、今年度より工学部・薬学部ともに習熟度別クラス編成での授業を開始した。プレイスメントテストの結果をもとに、両学部とも能力別クラス編成で1年生対象の英語必修授業を実施している。

今年度4月と7月に実施した上記テストのほか、前期末考査や学内 TOEIC (TOEIC IP) の結果を眺めつつ、今後の対策を打ち立てる。各テスト結果をまとめたデータの蓄積が少ないため、今後も収集作業を継続する必要があるが、授業内・外で実施するテストの結果により、学生の能力差にはかなりの幅があることが明らかになった。また、プレイスメントテストによって分けられた、同一クラス内においてさえも大きな幅があることがわかった。

キーワード：データ収集、プレイスメントテスト、能力差の幅

1. はじめに

1.1 授業実施形態における問題点

2017年度まで、工学部1年生の英語必修科目 Reading 1および2は、機械的に学籍番号で区分したクラス編成で授業を行ってきた。その結果、当然、同じクラス内に様々な能力の学生が混在していた。能力が中間層の学生に焦点を当てて授業を進行させていたものの、能力差が大きいと、やはり上位層・下位層それぞれの最たる学生にとっては、満足度の薄い授業であったことと思われる。学生に満足してもらえないとわかっておきながら授業を実施するのは、とても辛いことであるし、学生達に大変申し訳ないことである。

能力別クラス編成で授業を実施することは、以前から望んでいたが、英語担当の常勤教員数が1人であったことをはじめ、実施に踏み切ることを難しくしている様々な要因があった。学期が始まる前にプレイズメントテストを行い、採点を終え、学生をそれぞれのクラスに割り振るという作業を1人で行うことは極めて困難である。しかも、英語の必修授業が行われるのは1年次のみではない。テストを外注し、採点まで行ってもらうにしても資金が無かった。以上の通り、ジレンマを抱えつつも、授業を実施していた。

1.2 成績評価における問題点

学生の成績評価に関しては、授業中の演習や期末考査の結果を用いて採点を行っている。シラバスで示している通り、採点は定期考査の素点を60%の割合で、あとの40%は演習や小問の得点を反映することになっている。クラスは別であっても、期末考査は統一問題を作成し、解答・配点ともに科目担当者間で協議して決定している。担当者により、授業のスタイルが様々であることは確かだが、考査得点の公平性はおおよそ保たれていると言える。

授業を通じて学習したことを丹念に復習し、努力を積み重ねた学生の成果を、考査得点で測ることは可能である。高得点を獲得するには、日々のたゆまぬ努力が必要であるし、その努力は称賛に値する。しかし考査の得点は、あくまでも授業で扱った学習範囲内のみで力を測った場合の得点であり、真の英語力を測るまでには至っていないことは注意すべきである。もちろん、英語力を持った者であれば、考査得点も高いということは当てはまるが、次に示すような例も同じく起こり得ることである。英語力は十分とは言えないが、考査の出題範囲を徹底的に勉強したため、考査で高得

点を獲得できた者がいることは、別段珍しい事ではない。授業で学習したことを、徹底的にマスターするまで勉強し続けることで、英語力が高まるという結果に至ることも、もちろん否定できない。しかし、考査で測れるものは、あくまでも授業範囲内の学習内容を理解しているか否かである。この得点だけでは、その学生が持っている英語力が、一体どのぐらいなのかということまでは測定できない。

以上で、考査において測定できる面は、能力の一部分であることを示したが、採点は、先にも述べた通り、各担当者ともにシラバスに記載された通りの成績評価法を遵守した上で行っている。しかし、昨年度までは、成績資料を示した上で、担当者間で学生の成績情報を共有することが無かった。また、成績資料をもとに学生の成長を年度ごとに追っていくことや、クラス別の成長比較などを行ったことも無かった。そのため、学生に関する情報交換は、専ら授業の際に受けた印象のみに基づいて行われていた。もちろん、授業態度等から感じ取られる印象も、学生を知る上での重要な要素であることは否定できない。これから示す何点かの表をはじめ、ほかの様々な資料を整理していく過程で、印象のみに頼り過ぎていたということが明らかになった。印象と実際の成績でイメージが合致する場合もあるが、必ずしもいつもそうとは言い切れないということだ。成績資料を眺めることにより、学生の実際の姿と、教員側が持つ印象が合致しない場合があるということがわかった。

2. 状況改善へ向けた試み

上記のような問題が全て解消したという訳ではないが、まずは教員の増員が実現した。更に、資金の援助を受けることができるようになり、状況が好転することになった。

英語の担当教員が増えたことにより、作業の分担や、確認作業が可能になった。ほんの一例ではあるが、考査問題を作成する際も、問題の偏りを極力少なくすることができるし、問題ミスを防ぐこともできるようになった。また、進捗等を確認しつつ授業が進められるようになった。

また、教育後援会よりプレイズメントテスト外注のための資金援助が得られることとなった。そのため今年度・2018年度より、工学部・薬学部ともにプレイズメントテストの結果によるクラス分けが実現した。工学部は1年生約200名プラス再履修生を4クラ

スに、薬学部は1年生約120名を3クラスに分けて授業を実施している。採用したテストは、金星堂が作成しているVELC Testである。これは、実施時間70分のマークシート方式のテストで、学生はリスニングとリーディング各60問に挑戦する。評価は絶対評価ではなく、統計処理を行い500点を標準スコアとしている。ほとんどの受験生のスコアが300点～700点の範囲に分布する。難易度は、毎回同等のものとなるように作成されており、信頼のおけるテストであると認められている。近隣の大学にも、プレイズメントテストとして利用している大学がある。また、受験料は1人800円(税別)である。テスト問題作成・採点の手間を省くことができるうえ、テスト実施後1週間以内に成績を知ることができるため、クラス分け作業も速やかに進めることができる。

VELC Testの結果は、学生もパソコンやスマートホンで閲覧でき、各個人が自身の成長を確かめることができる。今年度は、現在のところ4月と7月の2回テストを実施し、それぞれ前期と後期のクラス分けのために得点を利用した。次回は12月に実施予定で、この成績結果は来年度前期の英語授業のクラス分けに用いる。

習熟度別のクラス編成が実現し、今までよりも効率よく授業を実施できる状態へと向かうことができた。ただし、あくまでも下地ができただけである。それぞれのクラスに応じた授業づくりには、もちろん工夫が必要であることは言うまでもない。

2018年4月と7月に実施したテストでは、一部の例外を除き、両学科ほぼ全てのクラスにおいて、平均点が上昇していることが認められる。しかし、VELC Testを実施する以前から、ある程度想像していたことではあるが、学生の英語力には、かなりの幅がある。これは、学部ごとのクラス別平均点・最高点・最

低点を示した、表1および表2を見ると明らかである。今まで、漠然と想像していた能力差も、表により明確に示されることとなった。クラスは、習熟度が上位のクラスから順にA、B、C、Dと示すことにする。平均点のみに注目してみても、工学部・薬学部ともに、AクラスとC・Dクラスでは100点以上の差が生じていることがわかる。また、最高点と最低点に注目してみると、両学部ともに同一クラス内であっても、かなり大きな能力差があると言える。先にも述べた通り、VELC Testを受験する、世の中のほとんどの人のスコアが300点～700点の範囲であるので、300点付近を得点する学生は、高校までに身に付けておくことが望ましい能力が、きちんと定着していない可能性が大いにあると考えられる。大学が公立化し、多少は状況が改善された可能性もあるが、比較検討するための資料が存在しないため、現在ここでは判断ができない。今後の授業改善に役立てるためにも、継続してデータを取り溜め、推移を眺める必要がある。

TOEIC等についても言えることではあるが、得点がある一定の点を超えると、その後受験する際、得点の伸びが停滞する傾向がある。一般的にそのような傾向があるにもかかわらず、両学部とも7月に実施したテストで、新たに最高得点獲得者となった学生は、4月に実施した前回テストから、60点(工学部)、40点(薬学部)と点数を伸ばしている。また、最高得点者以外にも、中には、100点以上得点を伸ばした者もいた。それぞれ、日々努力を重ねていることがうかがえる。

恐らくどの科目においても言えることであると思うが、成績上位層は既に学習習慣が身に付いており、こちらが心配する必要はあまりないと考える。安心して勉学に励むことができるように、激励を続ける必要があるだけだと考える。その一方、成績下位層への支援

表1. 工学部クラス別 2018年4月及び7月実施VELC Test成績

	平均点				最高点				最低点			
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
4月	528.5	470.9	437.3	392.0	607	486	458	413	491	458	416	267
7月	531.2	471.3	439.3	401.0	653	537	529	529	456	377	359	317

表2. 薬学部クラス別 2018年4月及び7月実施VELC Test成績

	平均点			最高点			最低点		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
4月	653.4	591.6	511.9	740	618	569	618	569	394
7月	652.4	613.0	539.3	754	725	627	584	554	373

表3. 2018年4月及び7月実施 VELC Test 成績 (工学部と薬学部の比較)

	平均点		最高点		最低点	
	工学部	薬学部	工学部	薬学部	工学部	薬学部
4月	453.2	588.8	607	740	267	394
7月	456.7	602.2	653	754	317	373

や対策を立てることは、かなり困難を要することが、表1および表2を見ると明らかになった。Cクラス、およびDクラスのクラス内の下位層は先にも述べた通り、高校までに身に付けておくべき学習事項を、しっかり体得できていない可能性が高く、大学での学習のスタート地点から既に遅れを取っていることが考えられる。また、高校卒業時までの学習事項を、あやふやな状態で身に付けてしまっている可能性も大いに有り得、それを矯正していくことには大変な時間と労力を要するはずである。

表3は、VELC Testの結果を学部間で比較したものである。入試形態等、様々な要因が絡んでいると思われるため、2つの学部が4月のスタート地点から大きく異なっていることに関しては、ここでは触れないこととする。専ら成長という観点で眺めてみると、両学部とも、おおよそどの項目においても伸びが認められる。

平均点について見てみると、薬学部の方が工学部よりも伸び率が高いことがわかる。データが不足しているため、点数の伸びの要因を特定することは、ここでは困難である。しかしながら、もし仮にこの伸び率に、授業回数やクラスの人数が関係しているのであれば、それぞれの学部において提供しているサービス内容は、同等に揃えるべきであると考えられる。財政面等も関係するため、即対処することは大変難しい問題であることは確かであろうが、どちらか一方だけが優遇されていると認められる場合は、偏りを是正することが必要であると考えられる。1クラスあたりの人数、および1週間あたりの授業回数については、次の「3. 前期考査成績、および、TOEIC IP 結果」の項目で述べる。

3. 前期考査成績、および、TOEIC IP 結果

3.1 前期考査成績

2018年前期末の英語考査結果を、以下の表4と表5に示す。工学部は4クラス編成で、1クラスあたり60名程度が在籍する。工学部で開講したReading in English 1は、1週間につき1回授業が行われた。ま

た、薬学部で開講したFreshman Englishは、3クラス編成で、1クラスあたり40名が在籍し、週に2回授業が行われた。

表4、および表5それぞれの平均点欄に注目すると、VELC Testにより能力別クラス分けをした結果が見事に反映されていると言える。また、各クラスの最高点と最低点を眺めた場合、考査結果もVELC Testと同様に、同一クラス内での得点に大きな幅があることがわかる。最高点に関して言えば、どのクラスにおいても満点か、ほぼそれに近い得点が獲得されている。最低点においては、最上位のAクラスを除き、どのクラスもほぼ同じような得点を示していることがわかる。各表の枠外に示した学年平均点を参考にして表を眺めてみると、学習した内容を理解できていない学生が多くいる可能性の高いクラスがあることもわかる。今後、学習内容の難易度が上がっていくが、学生がそれに耐え得るように対策を立てる必要があると言える。

次に、上位クラスの下位層も、平均点から大きく隔たった得点となっていることについて考えてみる。考査は授業で学習した内容を出題範囲としているわけであるため、上位クラスの学生で得点が低い者に関しては、注意が必要であると考えられる。能力が高いと診断されて上位クラスに割り振られたにもかかわらず、限られた学習範囲から出題された問題を解くことができなかったということになる。体調や精神面の状態が悪い場合は除外して推測すると、やはり勉強不足が原因として考えられる。勉強不足自体の原因と、解決策をまずは探る必要がある。

現在提供できる支援の一つとして、TOEIC IPの活用を挙げてみたい。大学へ入学し、今までと授業環境や学習内容が変化したこと、戸惑っている学生の中にはいるかもしれない。英語に日常的に触れておくためにも、そして、モチベーションを保つためにも、常に何らかのことは行うことを学生にはすすめたいと考える。TOEIC IPは、学内で気軽に受験できるテストであるし、年に複数回実施するので、その都度、英語力のチェックができ、良い自己啓発となるはずである。

表4. 工学部 Reading in English 1期末考査素点 (クラス別)
学年平均点: 69.0点、最高点: 100点、最低点: 27点

	A	B	C	D
平均点	85.0	69.1	66.2	55.9
最高点	100	100	90	99
最低点	55	34	30	27

表5. 薬学部 Freshman English 期末考査素点 (クラス別)
学年平均点: 81.6点、最高点: 100点、最低点: 51点

	A	B	C
平均点	87.8	81.6	75.0
最高点	98	96	100
最低点	71	54	51

3.2 TOEIC IP 結果

希望者のみの受験であるが、本学では、学内 TOEIC (TOEIC Institutional Program、通称 TOEIC IP) を年3回実施している。以下に、年度毎の1年生の受験者数、および、得点の推移を示す。「山陽小野田市立 山口東京理科大学紀要 創刊号」の pp.68-69でも示したことであるが、本学が公立化するという情報が広まった2016年以来、TOEIC IP の受験者数が増加傾向であるし、得点の伸びも確認された。しかし、1年生の受験者のみに焦点を当てた場合、必ずしも上記のことが当てはまるわけではない。

3年分という僅かな資料の範囲内でしか示すことはできないが、表6で示す通り、1年生の受験者数は確実に減少している。学生への TOEIC IP 実施の告知は、授業中のアナウンスと掲示板を用いて行っているが、この方法に関しては、以前と変更した点はない。新たに加わった点としては、TOEIC 受験を促すべく、昨年度から年に2回ほどの割合で、「英語のススメ講演会」と銘打った講演を行っている。学外で実施される公開 TOEIC と同様、TOEIC IP の受験も大いにすすめているが、残念ながら現在のところ受験者増加の方向へはつながっていないようである。しかし、下記の表で示されている通り、単純に得点のみを見た場合、

点数は伸びていると言える。比較的英語力に自信のある、少数の学生のみが受験する傾向にあるのかもしれない。

受験料が4,155円と高額であることが難点ではあるが、学内で受験できる世間で広く知られたテストであるので、今後も TOEIC IP を引き続き実施する予定である。英語力が、客観的にテストの点数として示されるため、学生にとって刺激になるであろうし、英語学習のモチベーションを保つのに役立つと考えられる。TOEIC のみを学生にすすめるわけではないが、身近で気軽に受験できるテストの1つとして、活用してもらえれば考える。

4. まとめ

表を作ることにより、改めて以下のことに気付かされることになった。

- (1) 学生の英語の能力差にはかなりの幅がある。
- (2) 能力別に分けたクラス内においても、能力差は依然として幅がある。
- (3) どのクラスにおいても上位層の学生は、授業での学習内容をしっかり身に付けている。
- (4) どのクラスにおいても下位層の学生は、考査成績がほぼ同レベルで芳しくない。
- (5) 各クラスの考査平均点の序列をみると、プレイスメントテストはクラス分けのために有効に機能している。

データを取り、分析し、それに基づき対策を立てるというサイクルに、遅れ馳せながらようやく着手するようになった。今までは教員間で、感覚や印象で学生についての情報交換を行っていたが、今後は、より客観的な視点で情報収集・交換ができるようになると言える。現在は、まだデータを取り始めたばかりであり、やっとスタート地点に立てただけの状態である。今後もデータ収集を継続し、その蓄積されたデータを

表6. 年度毎の1年生 TOEIC IP 受験者数と成績
(年3回実施、ただし2018年度は現在年度途中のため2回分のみ掲載)

	受験者数		平均点		最高点		最低点	
	工学部	薬学部	工学部	薬学部	工学部	薬学部	工学部	薬学部
2016年度	43	-	351	-	495	-	255	-
2017年度	19	-	326	-	490	-	145	-
2018年度	7	3	383	495	475	520	315	455

眺めることによって明らかになってくる事実や傾向等を見出すことができると考える。大学が公立化し、学生の学力が高くなったと一般的には言われているが、果たして本当にそうなのかと懐疑的に受け止めている教員もいることは確かである。データを眺めるこ

とにより、ことの真偽も明かされるはずであるし、学力の推移も見守っていくことが可能になる。また、本学に受け入れた学生が、プラスの方向に益々成長していくことができるように、その一助となればと考える。